



Title	大阪大学オープンサイエンスシンポジウム：オープンサイエンス時代の研究基盤と人材育成：日本における実装と展望
Author(s)	Ganguly, Raman; Gergely, Éva; 富浦, 洋一 et al.
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/101962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学オープンサイエンスシンポジウム

オープンサイエンス時代の研究基盤と人材育成 ー日本における実装と展望ー

2025年5月16日(金) 13:00~16:00

場所: 大阪大学図書館ホール および Web併用

大阪大学オープンサイエンスシンポジウム
オープンサイエンス時代の研究基盤と人材育成－日本における実装と展望－

2025年5月16日(金) 13:00～16:00
場所:図書館ホール および Web併用

大阪大学オープンサイエンスシンポジウム について

司会・モデレータ: 甲斐尚人
大阪大学 D3センター／ 附属図書館 ／ オープンサイエンス推進室



本シンポジウムの趣旨

研究データ管理とオープンサイエンス推進には

「技術的なデータ基盤」「その利用を支援する人材」の両輪が不可欠

★ 研究環境の変化、研究者・大学の責務

研究データポリシー、オープンアクセスポリシーに沿った研究の推進

主要な研究助成である科研費制度の変化:

- DMP作成の必須化
- 即時オープンアクセスの義務化

★ 本学の取組み

附属図書館・研究推進部・D3センターが連携:

- データ集約基盤ONIONやデータ公開基盤OUKAの基盤整備
- 教材・教育プログラム開発による人材育成
- 国内外機関との連携も推進

日本と欧州の先進事例を通じて

国内外の事例と知見を共有、研究者・支援者・技術者・教育担当者の連携を促進

→システム設計と支援人材像を議論と交流の場に

登壇者紹介



Raman Ganguly
先生(ウィーン大学)

ソフトウェア設計・開発部門の責任者。研究支援基盤PHAIDRAの運用に長年従事。Data Steward コース講師としても活躍し、欧州の持続可能な研究データ基盤とそのコスト構造に精通。



Éva Gergely
先生(ウィーン大学)

ITプロジェクトマネージャー。研究データ管理に関する国内協働プロジェクトのマネジメント等に従事。Data Steward コース講師としても活躍。「PHAIDRA」の開発およびユーザー要件の調整も担当。



富浦洋一先生
(九州大学)

システム情報科学研究院教授。研究データ管理支援部門長として、研究支援とストレージを統合したQRDMシステムの構築・運用に尽力。研究データ管理の中核を担い、支援体制全体の設計にも従事。



伊達進先生
(大阪大学)

D3センター教授。研究データ集約基盤ONIONの構築・運用を主導し、研究支援体制の整備にも日常的に関与。全学展開を見据えた中核的取組みに従事。



吉賀夏子先生
(大阪大学)

人文学研究科准教授。人文社会科学における研究支援とデジタル技術の橋渡しを担い、デジタル・ヒューマニティーズの教育実践や教材開発を先導。

パネルディスカッション:「未来を拓く研究データ基盤と支援人材像」

①研究データ基盤を「作る」だけでなく、「実際に使われる仕組み」として機能させていくにはどのような工夫や仕掛けが重要？

★ Raman Ganguly 先生(ウィーン大学)

PHAIDRAなどのシステムの、持続可能性を保つ上で最も重視されている設計思想や運用体制とは何か？

➡【持続可能性 × 人材】の視点

技術的な基盤を継続的に支える人材育成についての取り組み(専門性の継承やスキル維持の面など)

➡【人材確保の課題 × 組織設計】の視点

業務の属人化を防ぎながらチームとして基盤を支えるうえで、役割分担やスキル共有の工夫

パネルディスカッション:「未来を拓く研究データ基盤と支援人材像」

①研究データ基盤を「作る」だけでなく、「実際に使われる仕組み」として機能させていくにはどのような工夫や仕掛けが重要？

★ 吉賀夏子 先生(大阪大学)

「研究文化」、「教育的仕掛け」はどのようなものが必要か

➡ そうした変化に伴う支援や教育の在り方など、特に重要な支援の形など

★ 富浦洋一 先生(九州大学)

QRDMの基盤設計上で特に苦労された点

➡ 人的体制や学内調整の難しさ、運用面の定着に向けた工夫など

★ 伊達 進 先生(大阪大学)

ONIONの学内の多様なニーズを収集しながらの設計、特に設計に反映された現場の声など

➡ 技術的な面と、運用組織や役割の設計など

パネルディスカッション:「未来を拓く研究データ基盤と支援人材像」

②AIや自動化の進展により、研究データの管理や支援のあり方にも変化が求められる時代に。データ基盤の設計や支援人材の役割は、今後どのように変わっていくべきか？

Raman Ganguly 先生(ウィーン大学)

冨浦洋一 先生(九州大学)

伊達 進 先生(大阪大学)

吉賀夏子 先生(大阪大学)